
掛け違えたボタン

芹沢 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掛け違えたボタン

【EZコード】

N3337P

【作者名】

芹沢 忍

【あらすじ】

ETリサーバー「スカルズ」の羽田さんの、ちょっと複雑な胸の内です。達海を初めて見た時から監督となつて戻つてくるまでの想いを手短かに語っています。

あの日、『ゴールを決めた達海の姿が忘れられない。』正にＥＴＵの星と呼ばれるに相応しい姿だった。

初めて接した割れるようなスタンンドの声援。揺れるような熱気。日々つまらなく生きていた俺の心がそれによつて大きく揺さぶられた。押し寄せた一体感が自分を酔わせた。

それなのに、達海『あの野郎』はチームを去つた。しかもフレニアのデビュー戦で足をやつちまい、フィールドをも去つた。達海の海外移籍によつて残つたのは、ボロボロに崩れて行くチームとサポートーと経営陣。それから大きな失望という闇だつた。

放つておけねえ

チームを見捨てる奴らに感じる憤りは半端じゃない。オマエらは何を見ていた。達海だけを見ていたのか。

確かに俺は達海に魅せたれた。だが、あの時感じたこのホームの一體感に俺は共にいたいという想いを強く抱いた。まだガキだったからかもしれないが、居場所つてヤツを見つけたと思つていた。だがその矢先に目の前に開いたのは大きな穴だった。多くがそこへ落ち、枯れ葉が落ちるように姿を消して行つた。残つたものは僅かだ。

ＥＴＵは立ち枯れ、朽ち逝くしかないのか。それを見ているだけでいいのか。

逡巡する俺達がそこで見たのが村越さんだ。村越さんはＥＴＵの小さな希望だつた。

根は腐ちゃいねえ。残つた俺達が根性を見せなくてどうするんだ。俺達の声で生き返らせてやる。

スカルズはそんな俺達の決意だ。

「今度の監督は達海だ！！」

一報を聞いた時は驚いた。勝手にＥＴＵ『俺達』を捨てた男が監

督だと。プレミアでの故障はその報いだつたはずだ。それなのに今更戻れると思つてゐるのか。

燃え盛る怒りで身体が震えた。それと同時に思い出すあの場面。声援と熱氣、揺さぶられた身体と胸の内。そして抱いた夢……

海外移籍などしなければ達海はE.T.Hでプレーをしていましたかもしない。あの時と同じような場面にもつと出逢えたかも知れない。達海の勝手な判断が全てを潰した。その選手生命までをも。

「達海だけは許せねえ」

今のE.T.Hを作つたのは残つた俺達だ。あの時と同じように振り回されるのは許せない。

「俺達の想いを見せてやれ

周囲が慌ただしく動き出す。俺達にも監督人事に関する意見を言う権利はある筈だ。黙つて達海を迎える事など出来る訳がない。

俺達は抗議の為にクラブへと向かつた。裏切られた痛みは深い。

「俺達の声を聞かせてやる」

達海の姿が浮かぶ。まだ自分の奥底にある、あの日の場面。恨みと羨望が身を焼く。

押さえきれない想いが、達海が既にいるだろ？クラブへと足を急ぎ立てた。

(後書き)

「ハリックで達海の過去話を読んでる羽田さんが出てきました。

「あんな場面に登場させて達海が出ていたりうなるかも……」と思つたのでした。いやあ、達海のこと大好きなんだよ、羽田さんは！――そう感じて仕方ありません（^__^；）

これって、原作でも触れてそうだと、ちょっと単行本と連載の隙間がどうなってるのか気になつて、キドキしています。まだ知らないからどうもえてもいいよね？　なんて言い訳してみます（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3337p/>

掛け違えたボタン

2010年12月6日04時45分発行